
悲シキ悪ノ物語

明日香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲シキ悪ノ物語

【Nコード】

N9304M

【作者名】

明日香

【あらすじ】

日和で悪ノパロ。

僕が貴方を守るから貴方はそこで笑っていて。

悲シキ運命（サダメ）ゝ摂政ト臣下ゝ（前書き）

素敵動画を見ていて我慢できなかった・・・。

嫌われ者太子と男前妹子です。

BLは含まないと思います。

ok？

悲シキ運命（サダメ）ゝ摂政ト臣下ゝ

「遣隋使に任命されました、小野妹子です。」

あの頃が懐かしい。
何年前だっけな。

昔つからあの人は馬鹿だったよな。
ジャージももつずつと着てるし・・・。
あの人は世界で一番のアホ偉人じゃないか？

「おゝゝい！！妹子ゝゝ！！」

来たよ来たよ。

話の中心、アホ偉人こと聖徳太子が。

「妹子ゝ！さつきポテチのコンポタ味買おうと思ったら、間違えて塩味買ったよ。」

「時代設定丸無視！？それにそんなこと果てしなくどうでもいいですよ。」

「どうしても良くないよっ！そのせいで竹中さんに池に沈められたんだからな！三途の川がかなりクリアに見えたよ！！」

「なにその味に対するこだわりは！？ていうかあんた摂政のくせにパシられてんの！？」

こんなアホにツッコむ日常。
すごく疲れるけれど、楽しかった。

僕は忘れていたのだ。
近い未来に來る悲劇を。

貴方が摂政だと言っこともすべて。

廊下を歩いていると後ろからうざい声が聞こえた。

「妹子はっけーん」

「うわっ、うざっ!!」

「ひどい・・・。」

いつも通りのこんなやりとりをしながら部屋に戻ろうとドアの前にたつと何か声が聞こえた。

「・・・だよな。」

「太子なんか政治を任せてちゃだめだろう。」

「俺たちの苦勞を知ってんのかあの馬鹿は。」

「いつそ、太子殺して政治をよくするとか！」

「いいなあそれっ！」

「馬鹿な癖してろくに努力もせず、に国の頂点に立つなんて理不尽だもんな。」

「はははははっ。」

こいつら……。

太子だって太子なりに見えないところで努力してるのに、お前らはなにも知らないくせに……！！

ユルセナイ——。

ドアを開けて殴りかかりに行こうとしたとき太子に押さえつけられた。

「私は大丈夫だから。」

いつもの馬鹿な笑顔。
でも、どこか悲しげだった。

「太子……。」

「それに妹子が私のことを信じてくれるし、私はそれでいい。」

へラリと力無く笑う太子をみて誓った。

たとえ世界のすべてが

貴方の敵になろうとも

僕が貴方を守るから

貴方はそこで

笑っていて――。

悲シキ運命(サダメ)ゝ摂政ト臣下ゝ(後書き)

悪ノっていいですよねww
目から最上川です(T^T)

壊し始めタ日常へ幸セト欲望へ（前書き）

幸せな日常。

しかし幸せはだんだんと人々の欲望により崩されてゆく――。

壊し始めタ日常〜幸セト欲望〜

僕はいつもの様に書類整理に追われていた。

「小野っ！」

そこに仲がよい同僚がやってきた。

この同僚は話も合うし、仕事もできる、だからみんなから信頼されている人物で、僕はずっとあこがれを抱いている。

「おい妹子ー！！こっちへこーい！！」

「うげっ！アホ太子だ！！なんか呼んでる……。嫌だなあ……。」

「まあ……。頑張れよ。書類ならオレがやつとくから。」

「いいの？ありがとう！」

太子のところへ向かった僕を見ながら同僚は冷たい笑みをこぼしたが僕は気づかなかった。

「妹子〜〜ピクニックいくぞー!!」

「アホかつ!!仕事しろ!!」

いつも通りの日常。

しかし運命は

その日常すらも壊してしまった――。

壊し始めタ日常〽幸セト欲望〽（後書き）

まだまだ続きます W W

暗殺計画（前書き）

知りたくなかった悲しい現実――。

暗殺計画

仕事も一段落付き、そろそろ帰ろうと僕は荷物を持ち廊下を歩いていた。

「……でいつやるんだ？」

「明後日の夜、作戦を決行する。」

仲のよい同僚の声が聞こえた。

話の内容が気になり、声の聞こえる部屋に近づいた。

「お前がいれば心強いよ。」

「はは、ありがとな。でも油断は禁物だぞ！」

「わかってるって。なんせあの偉大な人物を暗殺するんだからな。」

暗殺………？

「では明後日、聖徳太子暗殺計画を決行する。みんな気をしき締めて頑張ろう。」

太子を暗・・・殺・・・。

あいつが・・・？

目の前が急に暗くなった気がした。

「明後日……か。」

妹子を見つけ、追いかけてきた私は暗殺計画のことを知り、ため息をついた。

そして妹子にバレないように静かに自分の部屋に戻った。

暗殺計画（後書き）

まだまだ続きます

とひあえずここまで読んでくださりありがとうございました！！

怒リト苦シミト涙ゝ狂イ始メタ運命ゝ（前書き）

ついに運命は狂いだした——。
朝廷は怒りと苦しみと悲しみに包み込まれた。

注：微グロ & a m p : 微病み妹子

怒リト苦シミト涙く狂イ始メタ運命く

あの暗殺計画を知ってから二日経った。

つまり今日が暗殺計画決行日だ。

僕はまだ信じられず、ただぼんやりと二日間を過ごしていた。

「小野っ！！」

「あつ、な、なに？」

あの仲のよい同僚だ。

「お前ぼーっとして……大丈夫か？」

「大丈夫だよ。心配してくれてありがとう！」

僕は必死に笑顔をつくった。

「そっか。何かあったら俺に言えよ。じゃな。」

「うん。」

本当にいい奴だ。
アイツは太子を暗殺なんてしない。
そう信じたかった――。

今日も太子に呼ばれ、怒りながらも太子の部屋に向かっていた。

「・・・で小野は・・・」

僕の・・・話？

この前、暗殺計画を話していたあの部屋で何か話しているらしい。

嫌な予感がした――。

「小野は俺のことを信じきっている。アイツには俺の邪魔できないだろう。『聖徳太子のお気に入り』だって言われてるけど実際はアイツも聖徳太子を憎んでいるはずさ。ただ皇族だからご機嫌取りをしているだけだな。」

「アイツは所詮田舎豪族。あの馬鹿に取り入ることしか出世するこ
とが出来ないからなあ。」

「可哀想な奴。」

「まあ小野に邪魔される心配はないし安心してできるな。」

「ああ、じゃあ今夜、聖徳太子を——」

聞きたくなかった。

シンジテイタノニ・・・

アイツハ・・・

ボクダケデナク

タイシマデ

キズツケルノカ？

ユルセナイ――。

太子を傷つける輩は

僕が

許さない。

ガチャ

「誰だ……—!?」

僕は同僚のおびえている顔を見て冷たく笑った。

「僕だよ……。」

「お……の……。」

嗚呼、愉快だ——。

怯えて真っ青なコイツ等の顔。

「なにがそんなに怖いのか……ああ、僕の持っているコレ（刀）？それとも……僕？」

愚かな奴。

暗殺しようとして逆に殺されるなんてね。

「ふっ……くっ……うえ……っ……っ……」

僕の泣き声だけが、静かに響いた。
――。

怒リト苦シミト涙く狂イ始メタ運命く（後書き）

はい若干妹子が壊れたようです。

こんな時、妹子を救えるのは今回出番0だった太子しかないww

太「出番0は余計だろ。」

はい、サーセンww

それでは……

太「次回をお楽しみにね」

一時ノ幸セテ貴方ノ笑顔（前書き）

哀しみと喜び。

貴方が笑えば僕は幸せなんですよ——。

一時ノ幸セケ貴方ノ笑顔

壊れたように泣き続けた僕の頭に一人の人物が浮かんだ。

行かなきゃ……。

太子のところへ。

赤く染まった同僚たちを地面に埋めて血で汚れた朝廷服から太子に貰った赤いジャージに着替える。

僕は今、無性に太子に会いたかった――。

嗚呼、そろそろ昼か・・・。

太子にカレーを作って持って行く。

太子は朝廷の縁側に座っていた。
その姿はとても儚く、触れたら消えてしまいそう・・・そんな哀しげなオーラを出していた。

「た・・・」

声をかけようと思ったが彼の初めて見るような哀しげな顔に戸惑ってしまった。

「・・・・・・・・妹子？」

「え、あ、は、はい！」

「いたなら声かけてくれよう!!」

「そんなことより太子。」

「スルー!? スルーなの!？」

内心ほつとした。
いつもの馬鹿な彼だったから。

「今日のお昼はカレーですよ。」

「おおカレー!!! 私妹子の作るカレー大好きでおまつ!!!」

そう言つて無邪気に笑う貴方。

僕は今まで心の中にあつた黒いもやもやが消えた気がした。

そして再び心に強く誓つた。

たとえ世界のすべてが

貴方の敵になろうとも

貴方の笑顔は僕が絶対に守ってみせる――。

「妹子……!!どっちが先に四つ葉のクローバーを見つけれるか勝負だ!」

「そう言って太子の前すぐあきらめたじゃないですか……」
「」

「よいスタート!」

「話を聞かんかいこのアワビが!」

幸せなんてほんの一時の物かもしれない。

しかしほんの一時だからこそ、本当の幸せがわかるんだ――。

僕は素直にそう思った。

一時ノ幸セシ貴方ノ笑顔（後書き）

はい。

やっぱりほのぼのって書きやすい！！

シリアスって好きだけど書きにくい……………。
それでは……………。

芭「おバイチャ」

そつえば細道の小説も書きたいな……………。

運命ノ時々憎シミト定メ（前書き）

ついに……その時はやってきた——。

これが運命というのならば

僕はあえて

それに逆らおう——。

運命ノ時々憎シミト定メ

バタバタバタ……

今日はなんだか騒がしいな。
そんなことを思いながら仕事をしていた。

「小野、ちょっといいか？」

「馬子様。」

「こっちへ来てくれ。」

やっぱり変だ。

この騒がしさ。

馬子様の険しい表情。

嫌な予感がした――。

馬子様に連れられやってきた部屋には太子と調子丸君がいた。

二人の表情もいつもと違い、深刻な……、いや、悲しそうな表情だ。

「妹子……………」

「小野、よく聞いてくれ。もうすぐ……ここは囲まれる。」

「……………はい。」

なんとなく予想はついていた。

いつかこんな時が来るのもわかっていた。

運命だから仕方ないことだともわかっていた。

でも

これが運命というのならば

僕はあえて

それに逆らおう――。

バン

「!?!小野!?!どこへゆく!?!」

「……妹子？」

僕は自分の部屋に戻り、太子から貰った赤ジャージに着替えた。

この運命を変えられる方法はこれしかない――。

バン

「小野！どこへ行っていた？」

「妹子・・・・・・・・・・。」

「馬子様、手伝ってほしいことがあるのですが・・・・・・・・。」

「なんだ？」

「太子の服を貸してください。」

「なぜだ？」

「僕が太子の服を着て、反乱軍の中へ行きます。」

「——っ！？妹子！！なに言って！？」

「……………生きて帰れる保証はないぞ？小野はそれでいいのか？」

「はい。」

「ダメだ！！妹子！！！」

僕は赤ジャージの上から太子の服を着込む。
そして今にも泣きそうな太子の顔に僕の服を押し当てる。

「太子、僕の服を貸してあげます。これを着てすぐ逃げてください。」

「嫌だっ！！妹子も一緒に——！！！」

「大丈夫、僕は強いから。」

太子の頭から冠を取り、それをかぶる。

「いもっ……」

「後ほど池で会いましょう。」

暴れる太子を馬子様と調子丸君が押さえつけた。

「やだっ！！妹子！！行かないで！！」

僕は振り向かず、部屋を出た。
これで……いいんだ。

これで貴方は笑っていられる——。

運命ノ時々憎シミト定メ々（後書き）

次回辺りが最終回になると思います。

長かった・・・。

ここまで読んでくださってありがとうございます！
それではおバイチャ

アリガトウゝ笑顔ト涙ゝ（前書き）

貴方が笑っていられるのなら、

僕は悪にだってなってる——。

アリガトウゝ笑顔ト涙ゝ

「貴様が聖徳太子．．．．．だな？」

「．．．．．ああ。」

「どうやら覚悟はできているようだな。」

「この大人数じゃ刃向かってもかなわないだろう？」

「わかってるじゃねーか。」

「貴様らが思っている程、私は馬鹿じゃない。」

「そうか．．．．．後悔も無いみたいだし、消えてもらおう。」

「じゃあな、聖徳太子。」

嗚呼、僕は死ぬのか。

別に後悔はない。

でも……もうちょっと貴方といたかったな。

いや、これでよかったんだ。

これで貴方を守れましたから。

さようなら、太子。

僕がいなくなっても貴方は笑っていてくださいよ？

貴方の笑顔が僕は好きですから――。

しばらくして、なんにも考えられなくなり目の前も暗くなった――。

「はっ……はっ……」

私は屋敷から、やっとのことで逃げられた。
手に、妹子から貰ったクローバーを持って。

他の人はもういない。
みんな、戦っている。

私は静かに燃え上がる屋敷を見つめ、皆が無事であるように祈った。
こんなことしか出来ない自分に嫌気がさす。

嗚呼、皆無事でいて――。

妹子の馬鹿、早く来いよ……。

この摂政サマが祈ってやってんだぞっ！

……お願い……だから……。

そのとき、私の持っていた四つ葉のクローバーの葉が一枚とれ、三つ葉になってしまった。

嗚呼、お前は私の願いをもう二度と叶えてくれないんだな。

私は空に向かって涙でぐしゃぐしゃな顔で精一杯笑った。

妹子、見てるか？

私なら大丈夫だからさ、心配すんなよ！

お前の望み通り、ずっーと笑ってるから。

アリガトウゝ笑顔ト涙ゝ（後書き）

終わったああああ！！

初めてまともに完結しましたw w

たぶん短編でリグレットメッセージ出すと思います！
出せるといいなw w

それでは！

ありがとございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9304m/>

悲シキ悪ノ物語

2010年10月13日05時03分発行